

開催地名：愛媛県四国中央市	
開催日時	令和2年1月18日（土） 14：30～16：00
開催場所	四国中央市消防防災センター 3階大会議室
語り部	齊藤 賢治（岩手県大船渡市）
参加者	安全・危機管理課職員、地域住民、関係機関 約100名
開催経緯	近年は大きな災害が発生していないため、住民の災害に対する危機意識も低く、また災害経験者も少なく、伝承活動ができていない。そのため、自主防災組織についても具体的な活動内容や過去の災害における課題や教訓が伝承されておらず、どのような活動を行えばよいかのかわからなくなっている。今回の語り部の講演を機に、防災活動のベースを確立したい。
内容	<p>（1）震災時の状況</p> <p>東日本大震災発生時、大船渡湾の堤防は全て破壊、粉碎した。水の進行方向へ向かった車は助からなかった。対策としては高台へ逃げるか、Uターンするか、乗り捨てて高台へ逃げるしかない。車は水深30センチメートルで走行が危険である。津波の知識が不足していた人や、家に物を取りに戻った人などが被災した。自分だけは大丈夫という心理学用語「正常性バイアス」が働いたのである。逃げない方法を探してしまう認知的不協和も働き得る。また、一晩中寒かったため高齢者は低体温症も発症した。</p> <p>避難動向のグラフによると、犠牲になった方の約半数は自宅にいて逃げなかった人だった。また、行政が指定した避難場所でも犠牲者が出た。津波は家を簡単に流す。遺体安置所では水死体より圧死体が多かった。</p> <p>震災後、電気、ガス、水道などのあらゆるライフラインが断絶した。私の場合、風呂の水はインバーター装置を車のバッテリー直流回路12ボルトから交流回路100ボルトへ変換してポンプを回し、川の水を汲み上げ、家では発電機でボイラーに電気を送り、灯油の準備も整ったところでボイラーのスイッチを入れた。圧力センサーが作動しないので、蛇口のホースから水を入れて圧力を上げてスイッチを入れ、10日ぶりに入浴できた。</p> <p>（2）震災時の行動と対策</p> <p>各自で、少しでも標高の高場所へ逃げるのが大切だ。それぞれ逃げましょうという意味の「津波てんでんこ」は、1人でも良いから助かって欲しいという願いが込められている。組織内でも内陸出身者のリーダーは、地震が起きても津波に意識がつかない。</p> <p>また、車は渋滞することを想定したほうがよい。太平洋では津波の時速は700から800キロメートルで、計算上では浅瀬から陸に到達するとき40キロメートルまで失速する。つまり早い時間に高台へ逃げるべきなのである。大船渡では</p>

10メートル、宮城県女川町では20メートルを超える津波が発生した。震災後、新たな防波堤が建てられたが、コンクリート製は寿命50年弱であることが懸念される。

(3) 便利または有効だったもの

カセットガスコンロ等のアウトドア用品や作業着は役立った。また、水の運搬には一輪車が大変役立った。古いエンジンを有した発電機の回転を改良し、ランプ、テレビ、洗濯機に使用した。これには、ある程度の知識と技能が必要であるし、工具もなければならない。また普段から生活水量を把握することも大切である。災害発生時、トイレは水に限りがあり、雨水を溜めてろ過し、沈殿させて使用した。実際給水車は4日後に到着した。

(4) 東日本大震災の教訓

震災直後からお互いに無事を確認し合うことのできるよう、普段からコミュニケーションの形成をしておくべきである。災害時に備えて「助け合おう」、「物を分け合おう」という意識を持つておくことが必要である。



開催地より

実際に大震災を経験され、災害の恐ろしさを認識されている語り部のお話は、聴く者の興味・関心を引く。本市の地域住民にとって、大変参考となる内容であった。今後の防災活動の一助としていきたい。